

2025年度 ソニー幼児教育支援プログラム
科学する心を育てる～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

小さな島で育まれる感性と創造性

～島で湧き上がる子どもの興味と持続する力～



西ノ島町立みた保育園

実践期間（2024年4月1日～2025年3月31日）

目次	
はじめに P 1
<u>本園が考える「科学する心」について</u> P 1
<u>「科学する心を育てる」保育の手立て</u> P 2
実践事例（1歳児クラス） 「どんどん」 P 3
【事例1-1】 7月 2日 窓から見えるクレーン車 P 3
【事例1-2】 7月12日 クレーン車から聞こえる音 P 3
【事例1-3】 10月17日～18日 「どんどん」 P 3
【事例1-5】 10月29日～30日 みんなで「どんどん」 P 3
【事例1-6】 11月13日 「どんどん」を室内で P 4
【事例1-7】 12月 3日 千切り絵あそびから「どんどん」へ P 4
【事例1-8】 12月17日 わたしが「どんどん」！ P 4
【事例1-9】 1月17日 まちづくり① P 5
【事例1-10】 2月 3日 まちづくり② P 5
【事例1-11】 2月18日 まちづくり③ P 5
◎考察 P 5
実践事例2（3～5歳児クラス） 釣り体験 P 6
【事例2-1】 6月26日 Aグループ 1回目 P 6
【事例2-2】 7月24日 Bグループ 1回目 P 6
【事例2-3】 10月17日 釣りの準備 P 7
【事例2-4】 11月 7日 Aチーム 2回目 P 7
【事例2-5】 11月14日 Bチーム 2回目 P 7
【事例2-6】 12月 6日 釣りチーム作戦会議 P 7
【事例2-7】 12月16日 釣リスポット下見 釣リマップ P 8
【事例2-8】 12月20日 大物を釣るために竿づくり P 8
【事例2-9】 12月25日 Aチーム3回目 P 8
【事例2-10】 12月26日 Bチーム3回目 P 9
【事例2-11】 3月31日 最後の釣り体験 P 9
◎考察 P 9
実践事例3（3～5歳児クラス） 定期連絡船「いそかぜ作り」 P 10
【事例3-1】 7月 9日 「いそかぜ」づくりスタート P 10
【事例3-2】 7月19日 「いそかぜ」の運転席から見える景色は… P 10
【事例3-3】 7月23日 日々バージョンアップ P 10
【事例3-4】 7月25日 イカリづくり P 10
【事例3-5】 8月21日 久しぶりのいそかぜづくり P 11
【事例3-6】 9月 5日 みんなでいそかぜづくり P 11
【事例3-7】 10月 4日 引き戸をつくるのは難しい… P 11
【事例3-8】 11月18日 船長に聞いてみよう P 11
【事例3-9】 11月25日 いそかぜを見に行こう P 12
【事例3-10】 11月26日 最終目標は… P 12
【事例3-11】 2月15日 生活発表会で披露 P 12
【事例3-12】 3月 3日 どうしたら海に浮かぶ？ P 13
【事例3-13】 3月26日 いそかぜ 海へ！ P 13
◎考察 P 13
まとめ P 14
今後の課題と方向性 P 14
終わりに P 14

はじめに

本園は、島根半島から北東へ約65km、日本海に浮かぶ隠岐諸島大小180余りの島々から成り立つ群島型離島のひとつ、西ノ島（にしのしま）に位置し、海に囲まれた豊かな自然環境をもつ西ノ島町にある。隠岐は2015年に国連の機関であるユネスコの正式プログラム「隠岐ユネスコ世界ジオパーク」となった。西ノ島町は、1つの島で1つの町を形成しており、約2,500人の人口規模、面積は55.98km²の小さな島で、地形は山がちで耕地は少ない。南岸は島前3島に囲まれた穏やかな海になっているが、北岸は強い波と風によって形成される美しい地形を有している。本園の園児数は年々減少しており、2024年度は34人が在園していた。園児の減少に伴い、異年齢保育に取り組み、子ども同士の関わりの機会を保ち、社会性と協調性を育む工夫をしている。人との関わりが減りつつあるなかで、海や森に携わる人とのつながりを大切にしながら、島の自然を活かした保育に取り組んでいる。



本園が考える「科学する心」について

本園は、子どもが楽しいと感じたことが持続する興味に繋がり、それを表現しようとする気持ちを「科学する心」と捉えている。身近にあるものや人との関わりの中で子どもたちがワクワクしている瞬間がある。その瞬間の出来事を子ども同士の対話や大人との対話を通して、関心が広がり、興味が続くことで、やってみたい、形にしたい、という表現したい気持ちに繋がる。知ったこと、やってみたことの体験の積み重ねが「科学する心を育てる」ことに繋がると考えている。

ワクワクする瞬間

関心の広がり
持続する興味

表現しようとする
気持ち

科学する心

子どもたちの気持ちの動く瞬間には、いろいろな出来事に触れる機会が必要だが、島にはどうしてもいろいろなものがない。商業施設、娯楽施設もほとんどなく、交通機関においても電車や飛行機を見る機会がないことから、本土の町と比べても、体験できることに制限がある。どうしても多様な体験、多様な人との関わりが少なくなってしまう。しかし、島の人々は、何もないからこそ生活の中で工夫し、何もないところでも楽しむ術を知っている。島で暮らす人や環境との関わりのなかで、子どもたちの気づいた瞬間、ひらめいた瞬間はたくさんあると感じている。

園の周辺と島で暮らす人たちとの関わり



農家の方に牛のことを聞いてみた



漁師さんが釣ったイカをみせてくれた

豊かな感性と創造性の芽生えを育てる土壌は島にこそたくさんある。「なにもない島」ではなく、なにもないからこそ、豊かな自然の中で感性が育まれることや人々の生活の工夫に触れながら、やってみよう、という気持ちをつくることのできるフィールドになる。
＝島は「科学する心」を育てるフィールドになる。

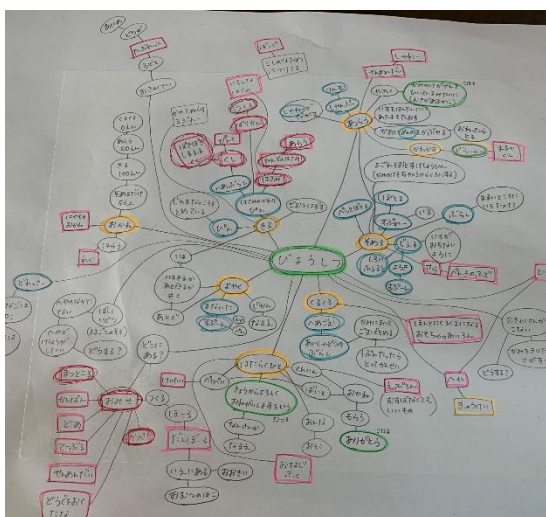
「科学する心を育てる」保育の手立て

普段のお散歩など園外活動を通し、島の自然や人との関わりといった多様な機会を設けながら、子どもたちの気づきや何かをやってみたいと思える環境を整える。子どもたちが普段の生活のなかで、何気ない言葉や興味の様子を、保育ウェブを用いて園で共有する。0～2歳児クラスは、感性の育ちを大切にして自然や環境の事象を子どもと一緒に感じながら対話を広げていくために散歩や園庭の探索活動を充分に行う。年少児から年長児クラスは、サークルタイム（子どもの対話の時間）で気持ちを聞き取りながら、みんなはどう思うかを対話の中で深めていき、一人ひとりの気持ちを繋げながら、やりたいことの実現に向かっていく。保育ウェブやサークルタイムの様子を踏まえて、保育者間の話し合いを行い、環境や活動を見直し、さらに子どもたちとの対話を行いながら、子どもたちの感じていることを少しずつ具現化していく。ドキュメンテーションを介して、その様子を保育者・保護者が子どもの感じていることや成長を日々確認しながら、興味が連続していることや表現の様子を共有する。



サークルタイム

活動の前に対話の時間を設け、子ども同士の対話を通して主体的な活動に繋げる。保育者は内容や発言を記録しておき、保育ウェブなどで可視化し、園全体で共有する。



保育ウェブ

子どもたちの関心の広がりを書き止め保育者で共有していく。子どもの一言や思いが活動にどう繋がっていったかが分かる。

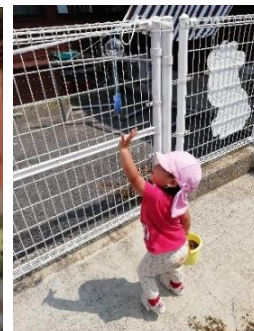


ドキュメンテーション

毎日の様子を玄関に掲示し、その日の子どもの活動の様子を伝える。保育者の今後の発展を話し合う際のツールとしても活用している。

実践事例（1歳児クラス） 「どんどん」

1歳児クラスでは、普段から園庭、園外活動で探索活動を保障しながら感性を育む環境を作ることに取り組んでいる。子どもたちは園庭の中でも風や音を感じて楽しむ姿が見られた。また、園付近の道路を通る車両や防災無線の放送などに興味をもち、園の近くにいろいろな車が通ることやいろいろな音がすることに興味を持ち始めていた。



【事例1-1】7月2日 窓から見えるクレーン車

保育園の目の前の海で、港湾の工事が始まり、窓からクレーン車が見られることに子どもたちは大興奮していた。クレーン車のことが大好きになったMはクレーン車が動いているとすぐに保育者に指差ししながら、動いていることを教えてくれるようになった。



【事例1-2】7月12日 クレーン車から聞こえる音

この日もクレーン車が動いており、海中の土砂を取る作業をしていた。海面にクレーン車の先端が落ちるときに聞こえる音に興味を持ち、作業するごとに聞こえる「バシャーン」という大きな音や土砂を引き上げるときに聞こえる水の落ちる「ジャージャー」という音を真似てみたり、拍手をしてみたりして楽しんでいた。



【事例1-3】10月17日～18日 「どんどん」

夏の間は窓に日よけをしていたり、水遊びが中心だったりで、子どもたちには工事の様子がよくわからなかったが、秋になり散歩に出かけると、工事の場所が変わっており、重機を見つけることができた。子どもたちは「どんどんがいたね。」と重機のことを「どんどん」と呼ぶようになった。

砂場での遊びの中に「どんどん」の動きをまねる様子が見られるようになった。砂をすくい大型トラックが運び、次のトラックが来るまで作業を休む様子を見ており、「どんどん、ねんね。」と言っていた。絵本の「おやすみ、はたらくるまたち」と見ており、それをイメージしたと思われる。



【事例1-5】10月29日～30日 みんなで「どんどん」

お散歩では恒例になった「どんどん」観察。ドンドンと音が聞こえるたびにみんな嬉しそうな笑顔を見せていた。Mは「どんどん」の作業の様子を細かく真似るようになり、砂をすくい出す車と運び出す車をわけて作業工程の模倣を楽しむ姿が見られた。Mが一人で模倣していた遊びを、今度は3人の子ども

もで模倣するように遊びが変化していた。子ども同士で役割を分担して、一緒に楽しむ姿がみられた。重機のおもちゃの取り扱いもあったが、保育者の声掛けで今持っている重機での役割をこなすことに気持ちを切り替えることができた。



【事例1－6】11月13日 「どんどん」を室内で

室内でも「どんどん」ができるように手作り玩具を作ってみた。腕にショベルカーのようなものをつけて、物をすくう動きができるようにした。子どもたちに重機のおもちゃをつくってみよう誘ったところ、MとJが「ダンプカー」づくりに挑戦することになった。折り紙を丸めてトラックのタイヤとダンプカーが運ぶ土を作った。2人はできたものを年上の子どもに見てもらい、「かっこいいね」「すごいね」とほめてもらったことで満足そうにしていた。



【事例1－7】12月3日 ちぎり絵あそびから「どんどん」へ

MとJは、保育者と一緒にちぎり絵遊びをしていた。二人は折り紙を上手に千切り、それを上から降らせると寝転がって喜んでいった。千切り絵遊びを片付けるときに「どんどん、たくさん集めてきてくださいー」と声をかけると自分自身がショベルカーやクレーン車になりきって、「ウィーン」「ガシャーン」と言いながら、ちぎり絵をたくさん集めてきてくれた。生活の何気ないところでも「どんどん」をキーワードに楽しむ姿が見られるようになった。



【事例1－8】12月17日 わたしが「どんどん」！

園庭での遊びの際に重機のおもちゃの取り扱いになってしまったことがあった。子どもと保育者で代わりになるものはないかと探したところ、くまでを使うと、重機のように地面に工事の跡のようなものができることに気づいた。自分自身を重機に見立てて工事ごっこする姿が見られるようになった。砂場での遊びも砂を取る車と砂を運ぶ車で役割分担ができており、大人を介さなくてもコミュニケーションをとりながら、遊びこんでいる様子が見られた。



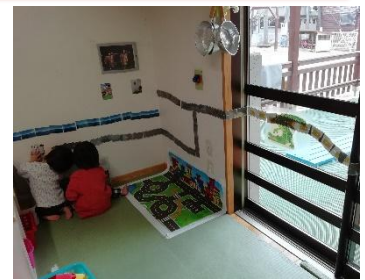
【事例1-9】1月17日 まちづくり①

子どもたちは「どんどん」の遊びを通して、工事や車が大好きになったことから、保育室に街のような環境を用意してみた。Mは道路をどんどん伸ばしていくことを楽しみ、KとAは、塗り絵で家を書き、街に貼っていった。



【事例1-10】2月3日 まちづくり②

街の近くに海があるという島ならではの環境のなか、船をつくってみたい子どもや海の生き物を付け加えたい子どもの姿が見えた。それから、保育者は画用紙で三角や四角をつくり用意した。乗り物などに見立てることを想定していたが、子どもたちは興味を示さなかった。三角や四角の紙を街に貼っていいよと促すと、街の中にある家や道路付近に楽しそうに貼る姿が見られた。



【事例1-11】2月18日 まちづくり③

街づくりもいよいよ本格化してきており、島の中でみたことのある建物の写真を出したところ、船の乗り場を貼って、そこに行くまでの道路を貼っていき、普段自分たちの生活している街をイメージしながら、街ができてきた。海があり、港があり、自分たちの家がある、自分たちの住んでいる街が保育室にできていた。自分たちで工事をして、自分たちの街をつくる、そんな達成感を持ったのではないかなと思う。



◎考察 窓から見える日常の風景の中、大人なら騒音と捉える工事の音を楽しむ子どもの様子を捉え、「どんどん」というキーワードで関心を広げていった。保育者は子どもの気持ちに応え、「どんどん」を表現できる環境を作っていき、様々な体験に繋げていくことができたと思う。その様子をドキュメンテーションでシリーズ化して、子どもの興味関心が広がっていく様子や子どもの感性が育つ様子を家庭と共有していくことができたように思う。子どもたちの「まちづくり」を通して、街は最初からあるものではなく、作るもので今ある街の風景は誰かが作ったものであるということに気づいたと思う。こうした経験が子どもたちの自分たちも何かを作ることができる（表現できる）という気持ちに繋がると感じている。



実践事例2（3～5歳児クラス） 釣り体験

年長クラスの子どもたちを中心に保育園で釣りをやってみたいとの声が上がってきた。島では釣りをするのは日常的なことで、子どもたちは大人に連れて行ってもらっているが、それを保育園で友だちと一緒にやってみたい、とのことだった。釣りに行きたい気持ちからGは保育園で釣り竿づくりを始めた。普段、大人が使っている釣り竿を思い出しながら、材料を探しはじめる。たけのこ掘りをしたときの竹を思い出し、竹で竿を作ることにした。Gは保育者と一緒に釣り竿づくりをはじめた。「釣り糸を引っ張れるようにしたい。竹に穴をあけて欲しい。」Gは工具を扱える職員にお願いした。竹に糸を通し、思っていたとおりの釣り竿ができるまで、保育者と試行錯誤を繰り返した。Gが釣り竿を作る様子をみて、Tも「釣り竿を作ってみたい」と言って作り始めた。釣りをやってみたい子たちが次々と現れたことから保育園での釣り体験を検討することにした。



◆釣り体験に向けての話し合い

海付近では危険が伴うため、保育者はまず安全対策とルールを考えた。ライフジャケットを着用すること、引率を必ず3人にすること、子どもの人数は5人まで、の約束をした。釣りに行きたい子どもたちを5人のグループに分けて保育園近くの岸壁で釣りを行うことにした。



【事例2-1】6月26日 Aグループ 1回目

1つ目のグループ（以下、Aグループ）は、この日釣りに行くことにした。釣り竿は「家の竿を持てきたい」との声もあったが、家庭ごとで差ができるため市販の竹の釣り竿を用意した。Aグループの一人Tは「自分で作った釣り竿で釣りをしたい。」と言ったので釣り針のところだけ保育者が取付けた自作の釣り竿で釣りを行うことにした。当日は、待ちに待った釣りができることもあり、子どもたちはみんなワクワクしていた。エサは保育者がオキアミと貝を用意した。釣りははじめて10分ほどは何の手応えもなかったが、1匹釣れると次々と釣れるようになった。「貝の方が釣れるんじゃない？」との声もあり、主に貝をエサに釣りを続けた。結果として、ベラ2匹、アジ1匹、フグ1匹、カサゴ1匹が釣れた。はじめての釣り体験で竿もエサもこれで釣れるだろうか、と思いながらではあったが、結果としてたくさんの魚を釣り上げることができた。釣れた魚は、みんなで見たらその日のうちに海に逃がす、ということに話し合いで決めていた。



【事例2-2】7月24日 Bグループ 1回目

2つ目のグループ（以下、Bグループ）は、この日釣りに行くことになった。Bグループはもう少し前に釣りをする予定だったが、雨や強風により、3回延期となり、4度目の正直で釣りに行くことができた。この日の釣果はフグ1匹だった。「魚を連れて帰って調べたい」との声があり、持ち帰り図鑑で調べたあとで逃がすことにした。7月は暑い日が続く、Bチームはなかなか釣りに行くことはできなか

った。順調に釣りを行うことができたAグループとは対照的に、天候の影響からなかなか釣りに行くことができなかったBチーム。そこから暑さの影響で園外活動ができない時期になり、出だしから自然の厳しさを感じるようになった。釣りの期待感が高かったので活動を楽しみにしていたにも関わらず、天候等の影響で延期しても拗ねる様子も見せず、自然のことはしょうがないこととして受け入れている様子が見られた。



【事例2-3】10月17日 釣りの準備

暑さもようやく和らぎ、釣りチームの活動が再開することになった。活動ができない時期が続いたが子どもたちのモチベーションは高く、この日は前回食いつきのよかった貝をエサとして取りに行くことになった。貝がいっぱいいるのはどこか、という話し合いをして、保育園の近くの水路に行くことにした。最初は上手く取れなかったが、徐々にタモ網の扱いにも慣れ、貝の隠れている場所も見つけられるようになり、100匹近い貝を採ることができた。Tが「釣りはしたいけど、貝がかわいそう。」と命の大切さに気づく様子も見られた。



【事例2-4】11月7日 Aチーム 2回目

前回は大漁だったAチーム。やる気一杯だったが、今回は魚の反応がまったくなかった。「なんで釣れない？」とみんなが考える中で、それぞれが工夫をするようになった。子どもから「竿を動かしてみたら？」「砂利を投げて、波が立てば小さな魚だと思って、大物来るかも」「場所を変えてみよう」の意見がでた。工夫はしたが、この日は1匹も釣れなかった。



【事例2-5】11月14日 Bチーム 2回目

Nが最初の方で1匹釣り上げることに成功するも他の子は1匹も釣れず。Nが釣った魚をみると、どこかで見たことのある魚で「この魚は放流体験で放した魚じゃない？」「放流した魚が大きくなったのかな？」と9月10日に行ったタイの稚魚を放流する体験で放した魚と同じ種類であることに気づいた。

◆魚を食べてみたい この頃から魚を釣ったら食べてみたい、との声が上がってきた。園で釣り体験を行うことも初めてだったため、釣った魚を食べて良いか、安全に食べるにはどうしたらよいかということも職員間で相談を進めていった。



【事例2-6】12月6日 釣りチーム作戦会議

Aチーム、Bチームともに2回目はほとんど釣れなかったの、子どもたちで話し合いを行うことにした。話し合いでは、「釣れる場所はどこかな？」「たくさん釣れる釣り方は？」「誰に聞いたらいいんだろう？」など



の意見が出た。「釣りに詳しいのは〇〇のお父さん！」とお父さんの名前がたくさん上がったので、お父さんたちに聞いてみようということになった。その日さっそく釣りや海のことに詳しいRのお父さんに聞いてみた。Rのお父さんから「釣れるポイントの地図」を持ってきてもらい、保育園近くの釣れるポイントを教えてもらった。釣りに詳しい人をもっと探してみようということになり、ドキュメンテーションに「釣りに詳しい人募集」と書き、保護者に周知を試みた。

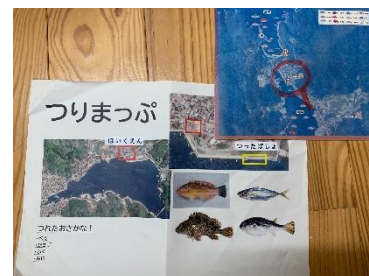


【事例2-7】12月16日 釣りスポット下見 釣りマップ

ポイント①老人ホーム近く Rのお父さんから教えてもらった場所。海底が砂から岩に変わるポイントがおススメと教えてもらった。しかし、海藻が多く、海の様子が見づらかった。

ポイント②コンビニ近くのバス停付近 Tのお父さん、Rのお父さんに教えてもらった場所で地域の人にもよく釣りをしている場所。下見の際に「クロダイ」を発見したため、子どもたちも「ここで釣りがしたい！」という雰囲気になった。

■**つりまっぷ** これまで釣りをしたポイントや教えてもらった場所を記したマップを作り、釣りスポットを視覚化した。普段からマップを目にすることで、釣り体験への期待感が増したように感じた。



【事例2-8】12月20日 大物を釣るために竿づくり

今度は大物を釣りたいと思っている子どもたちは竿を作ることにした。この日は切ってきた竹の加工作業を行った。Gは自宅から竹をもってきて、竿づくりに取り組んだ。「太い竹はタモ網にする」と言っていて、竹の枝をうまく使いながら袋をひっかけたタモ網を作っていた。太く作った竿を見ながらGは、「これだけ太い竿ならサメでも釣れそう」と言っていた。



【事例2-9】12月25日 Aチーム3回目

Aチームは、ポイント②コンビニ近くのバス停付近で釣りをを行った。釣りのことはドキュメンテーションで事前に周知しており、Tのお母さんが参加してくれた。地域で有名な釣りスポットのため、近所の人たちも見に来てくれ、釣りのアドバイスやサポートをしてくれた。この日はカサゴ、ベラなど計4匹が釣れた。今回は釣った魚を食べてみることにしており、事前に栄養士に相談した上で、魚をさばいたことのある保育士が調理することにした。

◆**魚を食べていいの？** 魚を食べることになるまでの話し合いで、「魚かわいそう」「逃がしたらいいんじゃない？」という声がある中で、「給食で魚は食べている」という声もあり、みんなが食べることに納得する。保育者は、食べるものには命がある、大事に食べよう、と声をかける。



【事例2-10】12月26日 Bチーム3回目

Bチームは、ポイント②老人ホーム付近で釣りを行った。Aチームがたくさん釣ったこともあり、子どもたちのやる気は高かったが、天気は少し悪く、風の強い日だった。この日はTのお父さんが来てくれて、釣りのサポートをしてくれた。この日はフグが1匹のみだったが、Kは初めて魚を釣ることができた。この場所でTのお父さんはカゴの仕掛けをしており、カゴに入っていたクエ、石鯛、カサゴなどをもらうことができた。カゴの仕掛けで魚が採れることに子どもたちは新たな関心を持った様子だった。今回は栄養士がもらった魚をさばき、魚の体の仕組みを教えながら、焼魚にして調理した。

◆食べるものを作ってくれる人がいる

前回、魚を食べたことで、保育園で食べるものを作ってくれる人がいることが気になってきた。調理室の様子を見に行く子どもの姿が見られた。

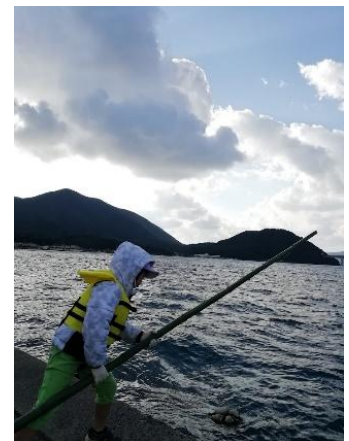


【事例2-11】3月31日 最後の釣り体験

「最後に釣りをしたい」との声があり、釣りチームの年長児4名で最後の釣り体験を行った。この日はGとTのお父さん、Tのおじいさんが来てくれ、様子をみてくれた。魚影も見えず、釣れる気配もなかったが、なんとか釣りたいという思いもあり、気温も低いなかで40分間粘り強く釣りを楽しんだ。最後の5分でGは大きなカサゴを釣ることができた。保育園に持ち帰り計測すると21cmの大きさがあった。最後に大物が釣れたことで、釣りチーム全体が満足した様子だった。



◎考察 本園では、釣り体験を行うことは初めてで、手探りの部分が多かったが、ドキュメンテーションを介して子どもの声や体験の工夫を保育者間で共有しながら取り組んだ。大人への憧れから釣りをやってみたいという気持ちと「釣り」という活動を通して詳しい人に聞いたり、工夫をしたりしながら、どうやったら釣れるかということに挑戦する姿を見ることができ、子どもの逞しさを改めて感じることができた。子どもたちが、気温、風、釣れない時期など自然の影響を強く受けながらも、粘り強く機会を待つことができたことに本当に驚いた。また、魚も釣りのエサも命であり、その大切さに気づき葛藤しながらも子ども同士の対話の中で解決したことにも驚いた。この体験を通して、釣りも魚も島では日常的なものではあるが、その日常が自然の厳しさを乗り越え、いろんな人の工夫や努力があることを子どもたちは知ることができたと思う。この経験がこれから様々なことに挑戦する気持ちに繋がると思う。



実践事例3（3～5歳児クラス）定期連絡船「いそかぜ作り」

年長クラスの中では、段ボール制作やブロック遊びが盛んに行われていた。島から本土に行く際や島から島に移動する際に船を利用することや日常的に漁船を目にすることから、子どもたちは制作で船をよく作っていた。フェリーや高速船など本土へ行く船を作ったり、豪華客船など、乗ってみたい船を作ったりすることもあった。ある日、Kはお父さんが隣の島への通勤に利用している「いそかぜ」という船を作ってみたいと思い、段ボール制作を始めた。「いそかぜ」は島から島へ渡るための定期連絡船でフェリーなどと比べると大分小型で定員70名の船舶だ。仕事にでかけるお父さんを見送ったり、K自身もお父さんの働く島に遊びに行く際によく利用したりしており、Kにとって馴染みの深い船で、Kはこの船を作って、乗ってみたいという思いを持ったようだ。



【事例3-1】7月9日 「いそかぜ」づくりスタート

Kは船作りを始める。目標は自分が乗れるサイズの船を作りたい→そのためには大きな段ボールが必要になる！→自分が運転したい！→だから運転席にこだわりたい。最初に作り始めた運転席。レバーやボタン作りなどインターネットで調べた資料を基に自分で作り始める。



【事例3-2】7月19日「いそかぜ」の運転席から見える景色は…

大型の段ボールを使い、船体を作る。実際の写真と見比べながらK「突き出ているところよりも高いところに操縦席がある！」と話し、運転席が船首よりも高い位置にあることに気づき最初に作っていた運転席を重ね2階建ての船を作りたいと話す。このころから他児もKが作っている姿や、「いそかぜ」に興味を示し「手伝いたい」と言う声やそれを使って遊びたい」と言う声が聞かれるようになる。



【事例3-3】7月23日 日々バージョンアップ

Kの「いそかぜ」はみんなに大人気。日々の遊びに使いながら、バージョンアップと修理をしている。いよいよ操縦席と船体をくっつけようとする。方法は子どもが決めた両面テープ、しかし上手くくっつかず、ボンドを使う。それでもくっつかない。原因を一緒に探る中でKが段ボールと段ボールの間に隙間があることに気づく。隙間を埋める為ダンボールの端材を差し込み接着してみると上手くくっついた。



【事例3-4】7月25日 イカリづくり

イメージが具体化できるようになり「イカリ」を作ったり（設計図から手書きで行う）、実際のいそかぜにもある外の席へ出るドアを作ったり、とこだわながらも一つひとつ丁寧に作成する。しかし、ここからプール活動なども始まり興味が徐々に薄れてしまう。更にお盆の長期休みも重なりしばらくの間放置



した状態になってしまった。

【事例3-5】8月21日 久しぶりのいそかぜづくり

船体になっていた段ボールは運手席部の重みに耐えられずつぶれてしまう。そして、その状況を見た担任からKへ声を掛け修理を行うことに。するとそれを見ていた他児から「僕も手伝ってあげる」「いそかぜはこんな色だからこのテープを貼ったらどうかな」と他児からのサポートもあり修繕できた。(親しみのあるものだったからこそ他児もイメージがしやすく手伝いにも入りやすかった?) 再び船への興味も強まりこの頃から最終目標を「海に浮かべる事」と話し始める。



【事例3-6】9月5日 みんなでいそかぜづくり

この頃から5～6人で作業をしており「一人よりみんなが手伝ってくれた方が早く進む」と嬉しそうに話していた。

色塗りの葛藤：いよいよ本格的に船体が出来始めると、色を塗りたいと話が上がる。そこで友だちと募って一緒に船体の色塗りを行う。しかし、Kの塗りたい色のイメージを具体的に伝えることが出来ず、友だちのやりたい思いと、自分のこだわりたい部分とがぶつかってしまい喧嘩などのトラブルにはならなかったものの、どのように伝えれば良かったのかという葛藤が本児の中でもあった。



【事例3-7】10月4日 引き戸をつくるのは難しい…

Kは「いそかぜ」を作る中で搭乗口のドア（引き戸）を作りたいと話す。しかし、いきなり作ることが難しく参考に保育室の引き戸を見て見ると、天井にレールがある事に気づき、扉+天井が必要だと気付く。実際に天井と扉を作るもスライドの仕掛けが難しく難航した。一人で解決が難しく、Kから「お集まりでみんなに相談してみる」と意見が出る。お集まりで相談してみた結果、実際にいそかぜを見に行く、いそかぜを作った人に話を聞きに行く、保護者の知っていそうな人に聞いてみる、という意見が出てきた。



【事例3-8】11月18日 船長に聞いてみよう

実際に船長さんに話を聞いてみることにした。保育者は船を運行する会社に連絡し、船長さんとKが電話をする約束を取り付けた。Kに確認し自分で直接電話をしてみたいというので、保護者の方に船長さんの電話番号を教えてもらい、Kは船長に電話をしてみることにした。K「今度いそかぜを見に行かせてください」船長「どうぞ来てください」とのこと。バスの時刻を事前に職員が調べておき、時刻表を一緒に見ながら会いに行く時間を決めた。Kは家庭でも内航船に乗ることが多く、乗船時間などをハッキリと記憶しており、時刻表の時間に合わせて、いそかぜを見に行くイメージができていた。

【事例3－9】11月25日 いそかぜを見に行こう

「いそかぜ」づくりをしているグループは「いそかぜ」を見に行くことにした。実際に近くで見ながら気になる箇所の写真をKは自らカメラを持ち記録。安全上中に入ることは出来なかったが目的のドアの部分は近くで記録することが出来た。船長さんは業務が忙しく質問など、色々と話を聞くことは出来なかったが自分で約束をして見に行けたということでKはとてもうれしそうにしていた。園に戻ってからは、他児も見学の様子が気になるようで「どうだった?」「いそかぜは見れた?」と質問が多くあったため、再びお集まりで写真が撮れたことと見学の様子を報告した。



【事例3－10】11月26日 最終目標は…

いそかぜを見に行ったこともあり、他児も作るイメージができ「ここはこんな風にしてみたらどうか?」「ここはこうなっていたよね?」と役割分担をしながら一緒にイメージを共有しながら作る様子が見られ、作る速度も早くなっていった。大まかな形が出来始めたところでKに最終的な目標を確認すると「船だから、海に浮かべてみたい。」と話していた。その後、最初の目的であった、人が乗れる船にしたいということに対して、船の後方を客席として、運転席は本物と同じく二階建てに出来るよう考え、運転席の下の部分に空間があるから、それを段ボールで埋めれば強さが出るのではないかと考えたKが保育者と一緒に大きさに合う段ボールを探す。廃材の中から見つけた段ボールを差し込んで強度を出すと、運転席の部分ができ船ごっこ遊びに発展。友だちから「運転席に乗りたい」と言われると「順番に乗れるようにするから並んでね」とルールも自分たちで作り、年長児を中心に船ごっこ、魚釣りごっこが行われた。



【事例3－11】2月15日 生活発表会で披露

いそかぜは、普段の遊びの中でみんなが使っていた。いつの間にか「みんなのいそかぜ」になっていた。そこから発表会に向けて「1年間頑張ってきたこと」の発表でいそかぜのことを話したいとKから言われる。そこで、これまで一緒に作ってくれたお友だちと色塗りなど最後の仕上げを行い発表会で保護者の前で披露をした。



【事例3-12】3月3日 どうしたら海に浮かぶ？

その後、再び船の引き戸作りを行う。Kのこだわりでもあった横に引いて開ける扉は、段ボールの支えを付けながらなんとか作ることができ、いよいよ海に浮かばせる為にはどうしたら良いかということをお集まりでKと話す。Kは「段ボールは海に浮かぶ」と話していたが、お集まりで友達から「段ボールは浮かない」と言われ、もしかしたら浮かばないのかもしれないと気づき、どうしたら良いかを保育者と話す。



【事例3-13】3月26日 いそかぜ 海へ！

保育者が「軽くて浮かびそうなものはあるかな」と聞くと、Kから廃材コーナーの発泡スチロールはどうかと聞かれる。浮かぶ確証はなかったが、段ボールの下に発泡スチロールをくっつけてみることに。いよいよ、「いそかぜ」を海に浮かべに行くことになり、近くの海へ出かけ、船は車にのせて運ぶ。海に運び早速海に浮かべると子どものいない状態で船はまっすぐに浮いていた。ここから製作者のKから順番に船に乗っていくことに。不安そうな表情だったがKが乗っても船は安定しており無事に海に浮かぶ船に乗ることが出来た。Kと一緒に船作りを行っていた子ども達も順番に乗りその達成感を共有した。しばらくすると段ボールの底部分から少しずつ浸水してきたため持ち帰ることに。しかし、自分の作った船で目標であった海の上で乗ることが達成されKは大変うれしそうだった。園にお集まりで伝えると、友だちもKの成功を喜んでいて。



◎考察 大きな船ではなく、日常で使う小型連絡船に興味を持ったKがちょっとした気持ちで始めたことが、一年がかりのプロジェクトになり、見事に船を海に浮かべるまでのことを成し遂げたことが本当に素晴らしかった。保育者は伴走者として船への関心の広がりをつまみ、Kの思いに添えることに徹していた。Kのこだわりが細部を作りこむことや海に浮かべるといった目標に繋がったが、周りの子どもたちもそれに同調し一緒になって考え、工夫をしている様子が印象的だった。Kと対話を繰り返しながら少しずつ工夫し、目標に向かう姿勢に大人も子どもも共感し、Kを尊重しながら一緒にやってみようという気持ちになったのだと思う。この経験は学校や社会でもなかなか得られない経験であり、Kだけでなく一緒に活動した子どもにとっても思いを表現することができたという大きな経験になったと感じている。



まとめ

いずれの事例においても、島で身近にあるものに関心を示したとき、保育者はしっかりと気持ちを受け止めて、子どもたちを見守りながら、少しずつ環境を整え長い時間をかけて活動に取り組むことができた。今回取り上げた活動事例では、1年を通した活動になっており、途中で様々な要因で活動が途切れることもあったが、保育者の一言や周りの変化などちょっとしたきっかけから再開し、継続できたことに改めて子どもの粘り強さとやり遂げる力に驚いた。今回の研究で、例え活動が途切れたとしても、再び興味をもった瞬間に子どもにしっかりと伴走していけば、興味が持続していくことができることが分かった。天候など自然の影響で活動が止まることがあったが、子どもたちの気持ちは荒れることはなく、状況を受け入れ、粘り強く活動に取り組んでいる様子が印象的だった。島という環境は自然の影響を強く受けることを子どもたちは十分に理解していると思った。いずれの事例も様々な出来事を乗り越えながら子どもたちの思いを表現することはできていた。こうした経験の積み重ねこそが子どもたちの自信を深め、将来の創造性を発揮する土台になると思っている。

■保育ウェブとドキュメンテーションを活用した共有

子どもの今の興味や成長の共有に保育ウェブやドキュメンテーションを十分に活用できた。保育ウェブで子どもの興味を可視化し、複数の保育者で流動的に子どもを支援できた。ドキュメンテーションで写真を添付して視覚化するとともに子どもの思いや子どもの言葉を記録し園で共有することで、担任だけでなく、他の保育者や園長、主任の視点から子どもの思いについて考えることに繋がった。また保護者との共有も同時に行うことができることから、家庭でも園での様子を把握することができたと思う。

■保育者の伴走

大人主導ではなく、伴走者の気持ちを意識したことで、長期的な活動を支えることができた。やらされている、ではなく、やりたいという気持ちと一緒にやろうという意識の保育者の伴走があったことが子どもの主体的な活動につながった。こうした意識が子ども同士の対話を促し、子どもたちが色々な考えを提起することに繋がったと思う。色々な考え方に触れることで、自ら工夫しようとする気持ち、学ぼうとする気持ちが深まったと感じている。

今後の課題と方向性

研究を通して、島の中でも日常の中から様々な興味が広がることが分かり、保育者が子どもの心の動きを捉えながら、挑戦する気持ちを発展させることができた。何気ない一言や普段から思っている憧れを形にできるように取り組むことができたように思う。反面、細かいところで大人がこうなってほしいという思いが無意識に出てしまったのではないかと心配になることもあったので、子どもに伴走するという気持ちをしっかりと持ち、見守ることを意識していく必要がある。今後もサークルタイム、保育ウェブ、ドキュメンテーションといったツールを活用し、子ども一人ひとりがワクワクしている瞬間を捉えながら、子どもの表現しようとする気持ちを形にしていきたい。島には豊かな自然があり、本園で実行できていない自然体験はまだ多くある。島というフィールドを活かし、子どもの個性に合った体験を模索しながら、多様な人との関わり、多様な体験を重ねることで、学校にもつながる「個別最適な学び」と「協働的な学び」の基礎となり、将来の生きる力になると思う。

■執筆者 執筆者代表 北原 慎也

メンバー 金山 未奈、辻 彩、木場野 雄吾、木伏 一斗、玉井 秀憲